日本史を彩った女性たち　第七回

「明治・大正に活躍女性（その1）」

講談師　一龍斎貞花

朝ドラ「虎に翼」が話題になっている。大河ドラマも女性が主人公。女性初の弁護士三淵嘉子。大正生れの昭和59年死去。エリザベス・サンダース・ホームの澤田美喜も明治生れだが活躍したのは戦後。明治・大正に活躍した女性を紹介します。

日本初の女子留学生と梅子

「捨てたつもりで出すが、また帰ってくることを心から待っている」の願いをこめて咲子を捨松と改名させ、12歳で津田梅子、永井繁子、吉益亮子、上田貞子等とアメリカへ、11年間留学。明治新政府は日本の近代化のためには、女性にも外国の教育や文化を身につけさせようと官費で。国もやるじゃないですか。しかし女性に参政権を与えたのは昭和21年です。送り出した親もえらかった。捨松はハイスクールをへて、ニューヨーク州の名門女子大バッサーカレッジを優秀な成績で卒業。帰国後永井繁子の結婚パーティーの余興に、津田梅子たちと英語劇「ベニスの商人」を上演。招かれた政財界の大物たちはヤンヤの大喝采。妻を亡くし三人の娘の躾や教育のためしかるべき女性を妻に迎えたいと考えていた陸軍卿大山巌は、捨松を見初め結婚を申し込むも、会津生れとあって宿敵薩摩の軍人からの申し出に断るものの、再三の懇望に結婚。さぞあつれきもあったことでしょうが、高い教養と流暢な英語で外国高官を接待する才色兼備の捨松はたちまち鹿鳴館の花。そして前号でも紹介した通り、瓜生岩子の奉仕活動にも、アメリカでの見聞から大きな尽力。捨松は高熱を伴う病に倒れ大正8年60歳で死去。日本最初の女子留学生鹿鳴館の花とうたわれ社会事業に尽した大山捨松（ラジオ福島、貞花の会津の女性たちより）

捨松と共に8歳でアメリカに留学した津田梅子は、日本語を忘れて帰国。その後伊藤博文、下田歌子と接し華族女学校に奉職後再びアメリカに留学。帰国後万国婦人連合大会に日本代表として出席、明治33年大山捨松の協力もえて私立英語塾を設立し、特色のある英語教育、個性尊重教育を推進。日本キリスト教女子青年会初代会長、津田英語塾を設立した女子教育家。

実践女子大学創始者下田歌子

幼名鉐は、和歌、俳句、漢詩を学び、宮内省歌道御用掛り八田知紀に入門。八田は鉐の和歌の天分を見抜き宮中に紹介。女官として皇后に仕え、鉐が詠む和歌に感銘を受けた皇后から歌子の名を賜り、皇后の学事に陪席しフランス語、和漢洋学を学び御書掛りに任ぜられ大好きな本を読破。8年間の宮中勤務を辞し父の勧めで下田猛雄と結婚。明治政府は政府高官の妻や娘が学ぶ女子校が無い。そこで宮中で深い教養を身につけた歌子に女子教育を依頼。東京麹町に私立下田女学校開校。伊藤博文や井上毅（こわし）の令嬢も通ったので上級階級の妻や娘が多く入学。

宮内省御用掛に任ぜられ明治18年華族女学校開校。明治天皇の内親王の教育係拝命。40歳の時ロンドンを訪れ下町の女学校では王室の子女も一般の女子も一緒に学び、一般女性も知性や教

養高く社会に出て就職する者もいた。一般家庭の女子が学ぶケンブリッジ大学の女子学寮、女子教員養成学校を視察し身分や貧富に関係なく、総ての女子が教育を受けられる仕組みを作ることの重要性を認識。待望のヴィクトリア女王にも謁見、欧州6ヵ国、アメリカなど視察し、帰国するや内親王御用掛りに任ぜられ、欧州での経験を生かし知育、徳育、体育を教育。授業は御成婚まで13年間続けられた。

民間の女学校設立のため東奔西走し明治31年帝国婦人協会設立。翌年私立実践女学校並びに女子工芸学校設立。

「社会の中堅となる中等の人及び下流の人を間違いないように教育して知識を進めながら固めてゆきたい」と、和歌や古典といった日本的教養、欧米視察で培った実践的な学問を教授、校長ながら教鞭を執り、ライフワーク「源氏物語」の講義。その後も順心女学校（現・広尾学園）、裁縫伝習所（現・新潟青陵学園）などの設立に携わり、校長を兼任し関わった学校は8校に及んだ。

晩年歌子は、闘病生活を送りながら車椅子で講話、校長室に生徒を集めて訓話するなど、教育への情熱を燃やし続け正に女子教育に生涯を捧げ昭和11年82歳で死去。名前は知っていたがこれほどの活動をされたとは、矢張り明治の女性敬服、驚きです。

（参考文献・歴史街道より）

若者憧れの的紫袴跡見花蹊

維新後、東京に出てきた花蹊は、ザンギリ頭に男装姿の良家の子女たちに「なんや、これはあかん」と女子教育へ向かわせた。天保11年摂津国木津村（大阪市浪速区）に生れた幼名瀧野。大庄屋だったが没落し、農民相手の手習い塾の父の代稽古をしていたが、物覚えよく向学心に富み両親に書を習い、12歳の時円山派に入門して日本画を学んだ。学費は扇面の絵付けでまかなった。姉が公家の姉小路公知（きんとも）に仕えたのを機に父も姉小路家に出仕、かくして20歳にして父の学塾を引き継ぎ、その学識と人となりを慕って数十人が入塾、当時男性にのみ必要とされた漢文も女子に教えるなど先駆的な教育。

尊皇派公家の若大将と呼ばれた姉小路公知が暗殺され、塾を京都に移転。

明治維新により天皇に伴い、姉小路家の当主となった公義（きんよし）に従う父の後を追って上京。元武士の子や公家の子相手に塾を開き、襖絵の依頼や新政府の外務省から来日外国人への土産にする書画の注文、赤坂御所に招かれ女官の教育と繁忙をきわめる生活だったといいますからすごいですね。令嬢のザンギリ頭に女子教育の必要性を感じ女子塾を開くと、習慣も伝統も違う東都での教育に苦慮していた公家や、尊皇派の当主は娘をこぞって入塾させた。

明治5年、国民総て学ぶようにと、学校がスタートし、庶民階級の娘たちのためにと東京神田に「私立跡見学校」開校。女性としての知徳教育を目指し制服の紫袴が、当時の若い男女の憧れの的であったという。生徒が増え明治21年旧大名邸宅だった広大な小石川柳町に移転。明治40年女流作家で太郎の母岡本かの子も卒業。年長の生徒が年少者の面倒を見る、日本古来の伝統行事や風習を大事にし春と秋の遠足、春の摘み草、花見、紅葉狩り、庭園巡り、社寺の拝観など季節ごとの娯楽や行楽など情操教育。女性としての智徳教育を行った花蹊は創立五十周年の翌年大正十五年八十七歳で生涯を閉じた。

（参考文献「歴史街道」）

女性初の国家資格医萩野吟子

夫から淋病をうつされ、男性医師の診察に激しい羞恥を覚え医師になる決意、明治12年29歳の吟子は男装して医学校へ。多くの嫌がらせを受けたが明治17年女子の受験が認められ、前期試験に合格したのは吟子ただ一人。翌年後期試験にも合格し女性医師第一号として東京湯島に開業、女性患者で一杯だったという。その後北海道で医院を開業、淑徳婦人会を結成し病気や怪我、災害時の対処法を教えるなど地方の医療に尽力し、その後東京に戻り再び開業。

シーボルトの娘、楠本イネが東京築地で産科医院を開業、吟子より10年前で女性医師第一号といわれているが、イネは国家試験を受けていない。国家試験に合格し「公許女医第一号」は萩野吟子とされ、大正2年63歳で死去。妻に淋病をうつした夫はその後どうなったことでしょう。

（東京新聞日曜版参考）

女に学問不要と言われた時代に学校を建てるは、国家試験に合格するは、明治の女性は強かったといわれるゆえんですね。